



2015年4月  
ご自由にお持ちください

**[特集]**  
**戦後70年**  
**時計屋さんの昭和日記**  
一青年のみた戦中戦後の横浜

**[展示余話]**  
**「あこがれの『団地』**  
—高度成長とベッドタウン横浜—  
**「ダンチ族」のアンケート調査について**

**[資料紹介]**  
**新発見！横浜駅での鉄道開業式写真**

横浜都市発展記念館

ハマ発NEWSLETTER 第24号 2015(平成27)年4月25日発行(年2回発行・不定期)  
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市ふささと歴史財団 〒223-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453  
電子ロコ/高橋健介 印刷・製本/株式会社佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

特別展のご案内



戦後70年  
時計屋さんの**昭和日記**  
一青年のみた戦中戦後の横浜

戦後70年を迎える今年、磯子区の時計屋さんが長年つけていた日記をもとに、戦争を挟んだ激動の時代(1930~51年頃)の横浜のくらしと世相を、一人の青年の視点からたどります。

【会期】2015(平成27)年4月25日(土)~6月28日(日)

【関連展示】旧第一玄関写真展「家族の風景」  
2015(平成27)年4月25日(土)~6月28日(日) ※観覧無料  
【図録】『時計屋さんの昭和日記  
一青年のみた戦中戦後の横浜』  
横浜都市発展記念館/編

寄贈資料の紹介

平成26年9月から平成27年3月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者	寄贈資料名	点数	寄贈者
伊藤敏雄旧蔵資料	14	伊藤英子	修学旅行しおり(昭和30年代)	3	廣嶋佑治
東京オリンピック関係新聞	20	野村義夫	『子供マンガ新聞』(昭和23、24年)	31	廣嶋佑治
アポロ11号関係新聞	10	野村義夫	子供向け絵本(昭和20年代前半)	8	廣嶋佑治
野毛山より黄金町方面を撮影した写真紙焼き(昭和26年)	1	山中隆三	昭和40年代の雑誌等	7	鈴木登茂子
『神奈川郷土史』(昭和5年)ほか	3	山中隆三	練炭火鉢	1	岩見恵次
丹阿弥岩吉画「[関東大震災時、横浜からの避難風景]」(大正15年)	1	吉村洪	ベビー用ハンドカー	1	岩見恵次
鉄道等の切符(昭和30年代以降)	1,470	磯部伸樹	手動式計算機	1	大野省治
東京オリンピック入場券(昭和39年)	1	磯部伸樹	公田町団地入居説明会資料(昭和39年)	1	森谷チエ子
妊産婦手帳(昭和18年)	1	廣嶋佑治	公田町団地住棟外観写真(昭和39年)	1	森谷チエ子

●表紙写真

奉公先の谷崎時計店の前で  
昭和10年代 下平修嗣氏蔵  
本展の主人公・下平政熙氏は後列左。

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分~午後5時  
毎週水曜日(祝日を除く)は午後7時まで  
(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか  
(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館します。)

■入館料

上記特別展開催期間  
特別展 一般300円 小・中学生150円  
(特別展の入館券で常設展もご覧いただけます。)  
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

それ以外の期間

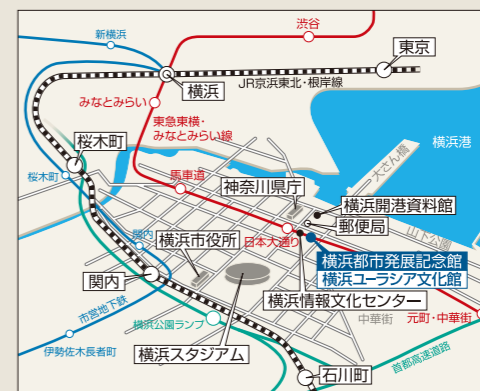
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

●毎週土曜日は小・中・高校生無料

●「濱ともカード」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」  
などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分
- あかいつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでも  
ご覧いただけます。



編集後記  
前回の特別展は団地がテーマということで、40代を中心にさまざまな世代の方が見に来てくださいました。今回は戦後70年を記念して開催する特別展です。戦争を知らない若い世代も含めて、多くの方のご来場をお待ちしております。(青)

◎次号発行予定 平成27年7月頃

# 時計屋さんの昭和日記

## 一青年のみた戦中戦後の横浜



谷崎時計店の店内  
昭和10年代 下平修嗣氏蔵



召集令が下って  
昭和14年4月9日 下平修嗣氏蔵



下平時計店の前で 昭和30年頃 下平修嗣氏蔵  
後列右から政熙氏、妻とよ氏、弟博照氏。前列中央長男修嗣氏。

昭和5(1930)年、12歳の少年が信州の伊那谷から横浜・根岸の時計店にやってきた。少年の名は下平政熙しもだいらまさひろという。政熙は横浜についたその日から平成6(1994)年に76歳で亡くなる前日まで、64年ものあいだ日記をつけていた。ことに戦中・戦後混乱期の日記には、この時代の生活と世相が臨場感豊かに記されており、貴重な歴史資料ともなっている。戦後70年を迎える今年の特別展では、当館の調査で昨年見出されたこの日記をもとに、激動の時代の横浜のくらしをたどってみたい。

### ■時計店のくらし

西根岸町(現磯子区下町)の谷崎時計店に住み込みで奉公をはじめた政熙は、主人や兄弟子から時計

### ■戦争の時代

昭和12年、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争がはじまった。事件以降、横浜からは兵士の出征があいつぎ、20歳になった政熙もその騒然としたようすを日記に記している。「バター」と花火がきこえて○○君万歳の歓呼の声が近づいて来た。見送る者手に手に日章旗をふりかざし、楽隊を先頭に国旗にかこまれて通りすぎ行く。(中略)店へ来られるお客様も皆国旗一本持つて入って来られる。皆国旗を持たねば片身(肩身)がせまい様だ」(昭和12年8月26日)。

昭和14年4月7日。政熙は店で接客中応召の知らせを電話で受けた。取り乱しては恥と、しっかり受け答えをして電話を切ったが「激しい心臓の鼓動丈は止める事は出来なかつた」。4月9日、政熙は軍服姿で、楽隊を先頭に店から根岸橋まで行進。盛大な見送りを受けて「感激しつつ」いったん帰郷する。15日に相模原の電信第一連隊に入営した政熙だが、脚気のため「即日帰郷」を命じられ、「しをれて」帰途につき、「そつと」店に帰つ

の修理技術を少しずつ身につけていく。「時計の中の機械を外して、きはつ(揮発油)であらつて組立てる。一番先(最初)は少しも分らなかつたが、二度目からはだん／＼分り、三度目には車をどこへ入れるかぐらゐは分つた」(昭和5年2月2日)。政熙は時計店の仕事のほか、掃除・子守りなど谷崎家の雑用もこなし、「遊びたい盛り」を朝早くから夜遅くまで働き通した。休みは月に1日、月給は入店4年目の昭和9年で4円(約8千円)。大卒の初任給が約70円の時代である。休日には伊勢佐木町に出かけ、オデオン座で「活動写真」(映画)を楽しんだ。20銭(約400円)の30銭で見られる映画はこの時期庶民の最大の娯楽だった。

た。

この後、横浜のくらしは厳しさを増す。「米が不足でかゆになつた」(昭和17年2月末尾)、「夕方鍋釜・やかんを買ふ余定(予定)で出掛けしたが、一先づ見て来た値段の高いのと代用品の多いのおどろいた」(昭和18年2月8日)、「近頃米代用食としてかぼちや架子(茄子)が多量に配給される」(昭和18年7月29日)など、日記は苦しくなりつつあった戦中の横浜の生活を伝える。政熙は昭和19年3月に出征し、その間、日記は途切れる。

### ■戦後の生活事情

昭和21年5月17日、政熙は大陸から佐世保に復員、この日から日記も再開される。政熙が帰国したころ、横浜の食糧事情は危機的状況に陥っていた。床屋によると「とうもろこしを粉ひき機で廻して粉となし主食代用」としているという。少ない配給を補うため人々はヤミ市へ行くが、「野毛ノマーケット俗に云ふやみ市には商品も次第に並べられてあるが、値の高い事は云ふまでもない」(昭和21年7月18日)と手が出ない。翌年になって

も米の配給は滞っていた。「米の遅配に依り、主食代用さつまいもの買出しに三人で氷取沢の方へ行く。目的の金子様でことわられて、それ以来転々と廻つたが、遂に得られず。二里余の道を歩いて大根を買つて帰つた」(昭和22年2月8日)。戦争が終わっても生活は苦しかった。

昭和23年1月20日、30歳になった政熙は滝頭(現磯子区中浜町)に自分の時計店を開業した。「十有余年社会の荒波にもまれ、黙々と働いて来たのもこの日の喜びを味ふため」だったのである。そして、昭和26年に結婚。3人の子供をもうけ、生涯を一時計店の店主として送った。

本展では、この魅力あふれる日記をもとに、激動の時代(1930〜1951年頃)の横浜のくらしと世相を、政熙の人生と重ねあわせつつ、当時の写真や生活用品もまじえて紹介する。末筆ながら大事な日記の展示を許された下平修嗣氏に心よりお礼を申し上げたい。

(吉崎 雅規)

下平政熙氏の日記  
昭和16年(左)、昭和11年  
下平修嗣氏蔵



# 余話 展示

## 「あこがれの『団地』—高度成長とベッドタウン横浜—」より 「ダンチ族」のアンケート調査について

高度経済成長の時代となった昭和30、40年代、横浜市内には日本住宅公団（現UR都市機構）によって数多くの住宅団地が建設されました。では、どのような人たちがそこに移り住んだのでしょうか。展示余話では、住宅公団の行った調査報告を紹介し、入居者の属性について見てみたいと思います。

日本住宅公団は昭和30（1955）年に設立された国の特殊法人です。主に大都市とその周辺に居住する勤労者を対象に、民間資本を導入しながら、行政区域を越えて広域的に住宅を大量に供給することがその設立の目的でした。住宅（賃貸・分譲）の建設と区画整理事業による宅地の造成などがその主要な業務です。

住宅公団が供給した住宅は鉄筋コンクリート造りの集合住宅で、「二団の土地」（「まとまった土地」、つまり「団地」に建設されました。それは昭和30、40年代、日本国内の各地に見られる光景となり、「団地」という言葉は社会に広く定着。「団地」「ダンチ族」「公団等の集合住宅群もしくはその建物、およびその居住者、という意味で使われるまでになりました。

さて、日本住宅公団はその業務開始より、住宅（賃貸・分譲）の入居者について詳細な属性調査を行っています（表1）。報告書の名称は当初、しばしば変更されますが、昭和40年代には「公団賃貸住宅入居者調査報告」と「公団分譲住宅入居者調査報告」となり、調査

は毎年度実施されました。昭和53（1978）年度に報告書は一本化され、公団の解散（昭和56年）まで作成されています。

その内容は、各年度に賃貸を開始した、もしくは分譲販売を行った個々の住宅団地について、契約者（入居者）を対象に実施したアンケート調査の集計結果です。調査項目は、年度によってやや異なり、また、その呼称も若干異なる場合があります。

入居した人々の多くは、東京の都心3区（千代田・中央・港）に勤める20、30代のホワイトカラー（技術者や事務職員）で、夫婦もしくは3、4人の家族が中心だったことがわかります。また、ここには示していませんが、東京の大

の申込回数、(9)分譲住宅の場合は一時金の最も大きな入手先、など。さて、表2は横浜市内の主な団地についてその調査結果の一部を抜粋し、一覧にまとめたものです（ただし、先述の通り調査項目の呼称が異なっていたり、選択肢も同一であるとは限らず、複数の回答を統合するなどして適宜調整をしています）。

入居した人々の多くは、東京の都心3区（千代田・中央・港）に勤める20、30代のホワイトカラー（技術者や事務職員）で、夫婦もしくは3、4人の家族が中心だったことがわかります。また、ここには示していませんが、東京の大

の申込回数、(9)分譲住宅の場合は一時金の最も大きな入手先、など。さて、表2は横浜市内の主な団地についてその調査結果の一部を抜粋し、一覧にまとめたものです（ただし、先述の通り調査項目の呼称が異なっていたり、選択肢も同一であるとは限らず、複数の回答を統合するなどして適宜調整をしています）。

表1

調査対象年度	昭和31-34	昭和35	昭和38	昭和39	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	～	昭和52	昭和53	昭和54	昭和55
日本住宅公団世帯用賃貸住宅申込者集計一覧表	○												
公団賃貸住宅入居者全数調査集計表		○											
賃貸住宅入居契約者調査集計			○	○									
公団賃貸住宅入居契約者調査報告					○	○							
公団賃貸住宅入居者調査報告							○	○	*この間、毎年度	○			
公団分譲住宅申込者調査							○						
公団分譲住宅入居者調査報告								○	*この間、毎年度	○			
公団住宅入居者調査報告											○	○	○

田・目黒・世田谷区などから移り住んだ人が大多数でした。

横浜市が発行した『市民生活白書—新しい横浜の記録—』（昭和41年）には、「新しい団地の出現」という項目を設けて、「（団地）に住みついた市民たちは—（中略）—東京との関係だけで生活していく人たちである。横浜市民としての意識は薄く横浜のなかの異国をかたちづけている」と記述しています。

しかし、住宅公団は昭和40年代以降、地元の在勤者もしくは在住者を優先的に入居させる制度を整えていきます。横浜市内でも、その比率の高い団地が増えていく様子が、表2からわかります。このように住宅公団の調査報告書は、高度経済成長を象徴する場所「団地」の様相を詳細に記録した非常に貴重なデータであると言えます。

（岡田 直）

資料=日本住宅公団調査報告

表2

団地名 (入居開始)	明神台 (昭33) 賃貸		公田町 (昭39) 賃貸		たまプラーザ (昭42) 分譲		左近山 (昭43,44) 分譲		洋光台北 (昭45) 賃貸		港南台かもめ (昭50,51) 賃貸	
	計(人)	比率	計(人)	比率	計(人)	比率	計(人)	比率	計(人)	比率	計(人)	比率
<b>世帯主年齢</b>												
20歳代	267	33.3%	481	45.0%	116	9.8%	285	21.6%	824	35.2%	701	57.7%
30歳代	415	51.7%	468	43.8%	705	59.4%	766	58.1%	1,166	49.8%	376	31.0%
40歳代	82	10.2%	65	6.1%	256	21.6%	202	15.3%	238	10.2%	82	6.8%
50歳代	21	2.6%	35	3.3%	88	7.4%	34	2.6%	86	3.7%	37	3.0%
60歳代以上	10	1.2%	6	0.6%	11	0.9%	11	0.8%	15	0.6%	4	0.3%
不明等	7	0.9%	13	1.2%	10	0.8%	20	1.5%	11	0.5%	14	1.2%
<b>家族数</b>												
2人	219	27.3%	474	44.4%	271	22.8%	306	23.2%	941	40.2%	803	66.1%
3人	318	39.7%	348	32.6%	376	31.7%	422	32.0%	768	32.8%	257	21.2%
4人	182	22.7%	164	15.4%	395	33.3%	467	35.4%	498	21.3%	123	10.1%
5人	46	5.7%	59	5.5%	108	9.1%	93	7.1%	102	4.4%	15	1.2%
6人以上	23	2.9%	21	2.0%	26	2.2%	22	1.7%	22	0.9%	2	0.2%
不明等	14	1.7%	2	0.2%	10	0.8%	8	0.6%	9	0.4%	14	1.2%
<b>勤務先所在地</b>												
千代田・中央・港区					558	47.0%	448	34.0%	600	25.6%	316	26.0%
台東・文京区	379	47.3%	602	56.4%	14	1.2%	16	1.2%	25	1.1%	24	2.0%
豊島・新宿・渋谷区	14	1.7%	53	5.0%	85	7.2%	42	3.2%	44	1.9%	46	3.8%
江東・墨田・江戸川・葛飾区	10	1.2%	46	4.3%	23	1.9%	10	0.8%	16	0.7%	8	0.7%
足立・荒川・北区	2	0.2%	15	1.4%	4	0.3%	7	0.5%	4	0.2%	5	0.4%
練馬・板橋区	3	0.4%	9	0.8%	1	0.1%	0	0.0%	5	0.2%	3	0.2%
中野・杉並・世田谷・目黒区	20	2.5%	29	2.7%	94	7.9%	36	2.7%	69	2.9%	23	1.9%
品川・大田区	125	15.6%	123	11.5%	167	14.1%	212	16.1%	454	19.4%	175	14.4%
東京都内(その他)	1	0.1%	4	0.4%	18	1.5%	6	0.5%	4	0.2%	4	0.3%
千葉県	0	0.0%	1	0.1%	1	0.1%	3	0.2%	1	0.0%	3	0.2%
埼玉県	1	0.1%	1	0.1%	7	0.6%	2	0.2%	1	0.0%	0	0.0%
<b>横浜市</b>	139	17.3%	97	9.1%	50	4.2%	342	25.9%	724	30.9%	392	32.3%
川崎市	66	8.2%	59	5.5%	122	10.3%	129	9.8%	280	12.0%	96	7.9%
神奈川県内(その他)	30	3.7%	16	1.5%	21	1.8%	43	3.3%	57	2.4%	89	7.3%
その他の府県	6	0.7%	4	0.4%	8	0.7%	5	0.4%	56	2.4%	10	0.8%
不詳	6	0.7%	9	0.8%	18	1.5%	17	1.3%	0	0.0%	20	1.6%
<b>職業種別</b>												
会社・団体役員			*選択肢なし。		98	8.3%	78	5.9%	166	7.1%	29	2.4%
個人業主・自由業	19	2.4%	2	0.2%	11	0.9%	15	1.1%	244	10.4%	35	2.9%
管理的職業	34	4.2%	152	14.2%	310	26.1%	250	19.0%	244	10.4%	60	4.9%
専門的・技術的職業	651	81.2%	632	59.2%	397	33.5%	362	27.5%	448	19.1%	359	29.6%
事務的職業					224	18.9%	297	22.5%	461	19.7%	338	27.8%
販売サービスの職業			*選択肢なし。		56	4.7%	117	8.9%	185	7.9%	173	14.3%
保安サービスの職業									23	1.0%	13	1.1%
技能的・労務的職業	59	7.4%	149	14.0%	45	3.8%	173	13.1%	454	19.4%	140	11.5%
その他、不明	39	4.9%	133	12.5%	45	3.8%	26	2.0%	115	4.9%	67	5.5%

# 新発見！ 横浜駅での鉄道開業式写真



図1 横浜駅での開業式 当館蔵(山本博士氏寄付金により購入)

当館では、平成26(2014)年10月4日から同27年1月30日の会期で、コーナー展「ハマに鉄道が走った日」を開催した。このコーナー展では、明治5年9月12日(1872年10月14日)に国内で初めて鉄道が開通したときの記念式典の様子を撮影した着色写真を初公開した(図1)。開業式当日に横浜で撮影されたオリジナル写真が発見されたのは初めてのことで、本稿ではその貴重な資料について紹介したい。

## 発見された 開業式当日の写真

鉄道開通時の写真といえ、当時の英字新聞「ファースト」に掲載された写真

が有名である。鉄道建設工事の進行を伝える明治4(1871)年の記事では、神奈川付近での線路敷設の状況や、横浜駅構内で建設中の各施設が、鮮明な写真とともに紹介されていた。しかし、開業式を伝える記事(1872年10月16日号)に貼付されている式典の写真は、残念ながら、横浜駅ではなく新橋駅でのものである。

同号には、同紙に写真を提供していたカメラマンのモーターが、開業式当日は新橋駅の撮影に行っていたため、横浜での写真は翌日の撤収作業中のものになったと書かれている。建築家ブリジエンスが設計した駅舎の瓦屋根が後ろに見えているとおり、しかしにこれは駅舎ではなく、式典で使用された仮設建築である

図2 開業式翌日の横浜駅

"The Far East" (1872年10月16日号) 横浜開港資料館蔵



(図2)。

今回あらたに発見された写真は鶏卵紙に着色されたもので、写真の右下に白文字で英語のタイトルと数字を入れる特徴から、下田出身の写真家臼井秀三郎が撮影したものと判断される。臼井は、同郷の写真家下岡蓮杖の弟子の一人として知られており、少なくとも明治2(1869)年には「臼井蓮節」の名前で開業していたと考えられている(斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』)。

臼井については、やはり初代横浜駅を撮影したものが知られている(図3)。いずれの写真も、大岡川を挟んで横浜駅の対岸にある外務省接客所の楼上から撮影されたもので、横浜駅を正面から俯瞰して撮影できる場所として、尾上町のこの場所が選ばれたのであろう。両者を比較してみると、開業式当日の賑わいぶりがよくわかる。

## 開業の日

当初、開業式は9月9日におこなわれることになっていたが、ひどい暴風雨に見舞われたために延期され、式典は12日に開催された。現在では、この9月12日を西暦に直した10月14日が「鉄道の日」とされているが、もし暴風雨がなければ、鉄道の日も現在とは異なる日になっていた

わけである。

開業式の次第を記した『幸臨鉄道開行式』(横浜開港資料館所蔵)館蔵諸文書によると、明治天皇をはじめとする一行は、午前10時に「新橋鉄道館」(当時はまだ駅という言葉は使われていない)を出発して、11時に「横浜鉄道館」へ到着した(図4)。式典は、駅舎の前に設けられた「便殿」でおこなわれ、着座した天皇の前で、外国公使をはじめ内外の商人たちが祝辞を述べた。式典が終了すると、天皇一行は駅舎階上へ上がって休憩を取ったという。図2に写っているのが、このとき建設された「便殿」である。

横浜駅での式典が終わると、一行は再び列車に乗り込んで新橋駅へと戻り、午後1時から、今度は新橋駅前設けられた便殿で同じように開業式がおこなわれた。終了後は、浜離宮内にある迎賓施設「延遠館」にて祝い酒が振る舞われたという。

## 鉄道開通に沸く横浜

あらためて開業当日の写真をみると、鉄道開通に沸く横浜の熱気が伝わってくる。大岡川にかかる大江橋には提灯が鈴なりに掲げられ、橋の上から橋向こうの駅入口付近までびっしりと見物客で埋め尽くされているのがわかる。

前出の『幸臨鉄道開行式』には、当日「鉄道館地」内には「棧棚」を設けて、名士の家族らの参列を許可することが書かれている。向かい合う巨大な2棟の仮設建築が、この「棧棚」に相当するのであろう。右奥に駅舎の屋根が見えているので、駅舎の前庭を囲い込むようにして、天皇の座する「便殿」と2棟の「棧棚」がコの字型に配置されていたことがわかる。

橋を渡ったところの右側に写っているのは、巨大な張りぼての鏡餅であろうか。文明開化の象徴ともいえる鉄道の開通を祝う式典でありながら、きわめて日本的な祝いの風景のように見える。このとき詰めかけた人びとは、いったいどのような都市横浜の発展を思い描いていたのであろうか。

最後に、本資料は山本博士氏(株式会社三陽物産)の寄付金により購入したものである。山本氏の多大なるご支援に感謝申し上げます。

(青木 祐介)

図4 横浜駅に到着した明治天皇

"The Illustrated London News" (1872年12月21日号) 横浜開港資料館蔵



図3 初代横浜駅 横浜開港資料館蔵

